

## 研究報告要旨

マルクス経済学において恐慌論は、「生産と消費の矛盾（商品過剰論）」を基軸とする恐慌論と「資本の絶対的過剰生産（資本過剰論）」を根拠とする恐慌論に大別される。前者を代表するモデルとしては、ハロッド＝置塩モデル、後者を代表するモデルとしては、Goodwin モデルがよく知られている。しかし、わが国において後者を代表する 1 つである宇野恐慌論は、未だモデル化されておらず、その動学が明らかにされていない。本稿の目的は、置塩信雄・伊藤誠（1987）の論争を手掛かりに、宇野恐慌論を正確にモデル化し、その運動を検討することにある。両学派間では、置塩・伊藤の論争以来、積極的な議論がなされておらず、両者が主張する体系の相違を、まず明らかにする必要がある。本稿では、両者の論争を通じて、置塩が解釈する宇野恐慌モデルはセイ恒等式（Say's Identity）体系であり、伊藤が主張する宇野体系はセイ方程式（Say's equality）体系であることを明らかにする。しかし、両体系ともセイ法則体系であることには変わりなく、マルクスの言う販売と購買の分裂（流動性選好）を捨象している点で、置塩の宇野批判はなお正しいことが証明される。一方、置塩は、宇野体系の運動を、恐慌が存在しない Goodwin モデルと同じものであるとみなしているのに対して、伊藤の主張を踏まえた、宇野・伊藤「恐慌」モデルでは、販売と購買の分裂を原因とはしないが、恐慌と解釈できる運動（カタストロフ）が生じ得ることを論証する。同モデルでは、カタストロフを含む循環運動が生じるケースがあり、宇野恐慌論の基本的特徴を備えたモデルの定式化を行えたことが、本稿の貢献の 1 つであると考えている。しかし、カタストロフを含む循環については、本格的にシミュレーション分析を行い、さらに検討する必要がある。